校長研修だより７４

スラムダンク

２０２２・９・２０　　重枝 一郎

私は，チームが活性化する中で相乗効果が生まれ，個人の力量を高めることができたらいいと思っている。「集団が個を育て，個の成長で集団が育つ」とよく生徒に話していた。ついでに集団主義と集団教育の違いについても併せて話していた。「集団主義とは違いよりも同じ面を強調して、個々のメンバーの基準に合わせるだけ。集団教育とは個を育成するために集団体験を活用すること」だと。

また，似たような話で同調と協調の違いについても話していた。「同調とは自分を殺して他人と合わせる。協調とは違いを認め合い，個人が独立している中で，お互い折り合いをつける」ことだと。

聞いた話だが「スラムダンク」などの作品で知られる漫画家の井上雄彦さんによると，魅力的なキャラクターをつくるコツは，**それぞれに必ず弱点をもたせる**ことだそうである。確かに完全無欠のスーパーマンが登場してしまうとリアル感が失われるかもしれない。さまざまな個性のキャラクターが交わるからドラマに深みが出るのだと思う。

私たちのチームもいろんな先生がいておもしろいドラマが毎日できていると思う。その逆を考えるとおもしろくないチームということになる。スーパーマンは現実どこにもいないが，だからこそチームをつくる価値があるといえる。お互いの弱点を補い合うことでスーパーチームに近づいていくと思う。スーパーチームが一番楽しい。

例えば，プレゼンで話すのは得意だが資料の整理は苦手とか，体力はあるがケアレスミスが多いとか，知識は豊富だがすぐに人と衝突するとか，それらの逆とか，きりがないくらい人には一長一短がある。それをわかればチームづくりはやれる。わかり合って組み合わさってチームとして個性が生まれる。そうなると一定レベル以上の仕事力は確保できる。つまりメンバーが有機的に結びつくということである。同質な人間が複数集まってチームを結成してもこうはならない。フォローする部分が少ないと，生きた組織体になりにくい。

でも個々人の長所，短所がパズルのように都合よく組み合う保障はない。

私が以前指導していたサッカーチームはまさにはっきりと弱点をもっている者の集まりだった。そのメンバーを組み合わせると徐々にパズルのようにはまっていく感じなった。そして，苦手を得意に変える選手も出てきた。ずっと「やりたくない」とか「できない」を言い続ける選手はいなくなった。それは，きちんと自分の弱みをさらけ出してお互いそれをフォローし合う中で変わっていったと思う。要は，そういう気持ちや考えを不安なく言える居場所であったことがよかったということになる。そのチームは市内７０校中２位になり，県大会に１１人でいった。

私たち教師も同じだと思う。自分の考えをもったり，伝えたりできるためには，３つの要因が必要である。自分の考えをもつ練習をする「認知的要因」，自分の考えをつくる機会を与える「習慣的要因」と一番難しいのは，自分の考えをもつことが不安でないという「感情的要因」である。練習や場づくりは誰でもできると思うが，この「感情的要因」をつくることは人間関係づくりにおいて，しっかり相手を大切にするマインドを育てていかなくてはならない。私たちは職員室，教室でそれができているだろうか。

高３の生徒の進路指導において高３の先生，皆川進路指導主事たちは忙しい毎日を送っていると思う。私たちは，スーパーマンではないが，スーパーチームにはなれる。みんなで乗り切ろう！！これからの会議等もよろしくお願いします。